

当面の技術対策（農産編）

平成23年9月1日

発行：ゆとりみらい21推進協議会 指導部会 幕別町忠類地区

8月下旬以降の天候不順により農作業の遅れが見られます。無理な作業とならないよう、早め早めの作業実施を心がけましょう。また、H24年産秋まき小麦の適期は種に向け、前作物の収穫作業や作付予定地の管理を計画的に行って下さい。

1 秋まき小麦

(1) は種前の準備

土壌物理性の悪化により根張りの悪いほ場が見られます。心土破碎等を実施し、根張りの改善を図りましょう。

土壌pHは必ず確認し、pH5.5~6.0を目標に酸度矯正を実施しましょう。

銅が不足しているほ場では、は種前に硫酸銅2~4kg/10aを施用しましょう。

秋まき小麦作付け予定ほ場において、多年生のイネ科雑草等が多く見られる場合には、は種後の雑草対策が困難となるので、は種前にグリホサート系の薬剤(ラウンドアップ等)で除草処理を行いましょう。散布時には周辺に飛散させないように十分注意して下さい。

(2) は種 ~ は種適期・は種量に注意! ~

越冬前(平均気温3℃以上:11月13日まで)の目標葉数である5葉程度を確保するには、積算気温で470℃必要であり、大樹アメダス平年値から計算すると**は種適期は9月20~24日**になります。

過繁茂を避けるため、は種粒数は必ず『ホクシン』より減らします。このことから、は種機の調整をしっかりと行いましょう。

深播きは発芽不良や二段根の発生による生育不良、雪腐病等の発生要因となりますので、は種深度は3cm程度となるよう作業機の調整を十分に行いましょう。

表1 は種期別は種量の目安 (大樹アメダス平年値使用)

区分	早播き	適期播き	遅播き
は種日	9月15~19日	9月20~24日	9月25~27日
は種粒数(粒/m ²)	140		
は種量(kg/10a)	5.1		

は種量は千粒重36gで計算

(3) 施肥

越冬前の茎数や葉数を確保するためには、**基肥窒素は4kg/10a**で十分です。

リン酸・加里・苦土は全量基肥で施用します。

銅不足のほ場で、は種前に硫酸銅を散布していない場合は銅入り肥料を使用します。

表2 十勝火山性土における基肥施肥量(kg/10a)

	窒素	リン酸	加里	苦土
基肥量	4	15	10	4

(4) 除草剤

除草剤はは種後に必ず処理します。ガレーズ乳剤またはゴーゴーサン乳剤30等で土壌処理を行いましょう。

2 馬鈴しょ

- (1)皮むけ・傷や打撲防止のため、塊茎表面がコルク化してから収穫しましょう(茎葉枯ちよう後7~10日後が目安)。
- (2)茎葉枯ちよう後、土壤中に長期間放置すると黒あざ病の菌核が付着しやすいため、長期間土壤中に放置しないように努めましょう。
- (3)収穫はできるだけ天気の良い日(土壌適湿時)に行いましょう。
- (4)馬鈴しょの落下の高さは20cm以下を目安に機械を調整するとともに、落下場所のゴムカバー、クッションなどの点検をしましょう。
- (5)収穫後は直ちに風通しの良い日陰に仮収納し、風乾してください。高温時の直射日光下に放置すると緑化と小さな傷口から腐敗や変色が急速に進むため、十分注意しましょう。また、通気性の悪いクロスシート等をかけ放しにすると、温度が上がりがすぎて黒色芯腐れが発生しやすいので注意しましょう。

3 てんさい

- (1)一部ほ場で褐斑病の発生が見られます。ほ場確認のうえ、防除をしてください。
- (2)ヨトウガや葉腐病の発生しているほ場は、併せて防除を行いましょう。

4 豆 類

- (1)ビーンカッター、ビーンハーベスタの整備、調整を十分に行い、裂莢や破損粒の発生を防止しましょう。
- (2)金時類は、天気予報等を参考に、成熟後(熟莢率70~80%)速やかに収穫し、収穫期前後の降雨による色流れを防止しましょう。
- (3)小豆・菜豆類(いんげんまめ、べにばないんげん)のゾウムシ類被害対策
ゾウムシ類は、収穫機等の残留子実や保管場所にこぼれ落ちた子実にも産卵するので、23年産への混入が無いよう、収穫前に清掃を徹底しましょう。また、は種後の余った種子等も速やかに適正に処理しましょう。
成熟莢に産卵することから、成熟期以降は早期に収穫を行いましょう。
収穫した豆は速やかに出荷し、必要以上の長期間の保管は避けましょう。

ゆとりある作業で農作業事故の防止を！
作業機を路上移動する場合は、反射板や低速車マークを装着し、
追突事故を防止しましょう！